

# 西山家に於ける聖淨二門並に釋迦彌陀二教

## 論を究めて眞宗の二門二教論に及ぶ (三)

上 杉 慧 岳

### 四、證空の聖道方便淨土眞實論と一代教即觀經說(絶對的教判論其二)

前項に引用せし祕決集第四終の文に依れば、明に聖道教には永く眞實の義なくして、其れは皆淨土教の爲めの方便として、一切の衆生をして他力の來迎を期せしむることを以て目的とするものとなるなり。故に祕決集第四九一頁下の處には、又明に、

聖道ハ別時方便、淨土ハ眞實也。

と示し、同第十七三八四頁上には、

今造ルニ難易ノ教ナリ。娑婆ノ成佛難キ故ニ可レ厭ミ離穢土一。極樂ノ成佛ハ易キ故ニ示下可レ欣ミ求淨土ニ之方便也。是云ニ方便眞實一乃至聖道教ナ云ニ智慧一。淨土宗ナ云ニ慈悲ト。聖道教者智慧皆留レ名ニ方便也。淨土

教者慈悲就<sup>キテ</sup>名體<sup>ニ</sup>眞實也。故聖道教<sup>ニ</sup>就<sup>ル</sup>淨土宗<sup>ニ</sup>而入<sup>ル</sup>眼故<sup>ニ</sup>依<sup>リテ</sup>觀經一卷<sup>ニ</sup>諸經<sup>ノ</sup>卷數<sup>ヲ</sup>納<sup>ル</sup>之<sup>ニ</sup>。  
と云ひ、玄自一九頁下には二道を釋したる後、

二種ノ道共ニ雖<sup>トモ</sup>可<sup>レ</sup>赴<sup>ニ</sup>佛果<sup>ニ</sup>。行門<sup>ハ</sup>聖淨二教<sup>ヲ</sup>指<sup>ス</sup>一實<sup>ノ</sup>方便也。雖<sup>レ</sup>被<sup>ニ</sup>凡夫調熟<sup>セ</sup>直<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>成。

とあり、更に祕決集第四八三頁下を見るに、

於ニ序題門<sup>ニ</sup>攝<sup>スル</sup>八萬四千<sup>ノ</sup>教之時<sup>ハ</sup>者。雖<sup>レ</sup>有<sup>ニ</sup>皆蒙解脫之益<sup>ニ</sup>納<sup>ル</sup>ガ序題<sup>ニ</sup>故皆是<sup>レ</sup>方便也。乃至七  
門共廢<sup>ニ</sup>釋迦一代教<sup>ニ</sup>者爲<sup>ニ</sup>方便<sup>ニ</sup>欲<sup>スル</sup>不<sup>レ</sup>許<sup>ニ</sup>出離<sup>ニ</sup>也。依<sup>レ</sup>之若<sup>シ</sup>無<sup>ニ</sup>觀經<sup>ニ</sup>者釋迦一代<sup>ノ</sup>教<sup>ハ</sup>者皆可<sup>レ</sup>  
無<sup>ニ</sup>出離生死<sup>ノ</sup>要路<sup>ニ</sup>也。

と云ひ、同四八九頁上には、

若<sup>シ</sup>無<sup>ニ</sup>來迎<sup>ノ</sup>慈悲<sup>ノ</sup>者、一代<sup>ノ</sup>教<sup>ハ</sup>遂<sup>ニ</sup>可<sup>ニ</sup>方便<sup>ニ</sup>而無<sup>ニ</sup>眞實<sup>ニ</sup>也。以<sup>ニ</sup>觀經<sup>ノ</sup>慈悲<sup>ニ</sup>爲<sup>ニ</sup>一代<sup>ノ</sup>眞實<sup>ト</sup>  
也。

と示し、次下に至りては、來迎につきて眞實方便の義を論じ、諸教の利益は唯是れ來迎なり。此の  
來迎の慈悲を機の三業に取り入れて聖道教に智慧の位に之を談ず、故に出離の利益はなきなり。そ  
れ佛法の利益は來迎の慈悲より以外に二つの利益はなきなり。此慈悲を我心に納めて邪正一如因果  
不二等と談ずる故に皆利益を失す、故に別時の方便とす（以上抄録）とあり、而して此を終に結びて  
（九一頁上）、

悉皆聖道者爲別時方便也。從觀經一代皆成眞實。從諸經一代爲方便也。

と云へり。如何に觀經を以て一代教の中心と見、以て聖道方便淨土眞宗實説を立せむとするか。容易に認めらるゝなり。即ち佛陀がその教説に於いて眞實義を有のまゝに開顯し給へるものが淨土の觀經と見むとするなり。故に觀經を以て一代教の中心として一代教を批判せむとするが西山の一代教觀となるなり。證空が別依觀經を開原の旗幟とし、觀經の研究にその一生を捧げたる所以も此に首肯さるものなり。されば證空に於ける一代教と觀經との關係論は此を深く探らざるべからざることを知ると共に、此に興味深く思はるゝは、上に掲ぐる諸文に於いて、屢々證空が聖道方便説を述ぶるに當りて、別時なる語を用ゐて聖道教のすべてを別時方便教と斷定することなり。この別時なる語は勿論善導の疏に出づる所謂別時意の語よりとり來れるものなるべし。若し然りとせば、往古道綽善導出世の頃、支那にありては、當時の聖道教家を代表する通論家の人々が、觀經に説く往生淨土の義を以て別時意なりと論難せしに對し、今は反りて淨土教家よりして、聖道の一代教を別時意なりと論定するに至りし事は、如何に處と時との相異するとは云へ、その論難の主客相轉倒するに至りし事に聊か痛快を感じざるを得ざるなり。

而して今更に其の觀經と一代教との關係に就きて直接論示せる處を探ぐりしに、大略左の數ヶ處得たり。即ち、

祕決集一 一二頁上、二四四頁下、三四八頁下、三五〇頁上、三五二頁上、三五二頁下、五二一九頁下、六二二七頁下、六一三五頁下、八一七三頁上、一七三八四頁上 一一〇四五〇頁上。八講論義一六頁上。羅注八 一四九頁。一〇一八〇頁上。等。

今此等の諸文により證空の釋意を考ふるに、その佛陀の眞實教の開顯を觀經に於いて認め、餘の一代教を以て其の方便とする義の基く所は善導疏に依る證空としては、此を善導が立せし彼の化前序の建立に依りしことは明かなる事實なり。故に祕決集第六二二七頁には、化前序を釋して、

以釋迦一代娑婆爲序。而以淨土彌陀爲正宗。故立化前序攝釋迦一代化也。

とあり。一三五頁下の所明又此に同じ、而して化前序に釋迦一代教を攝すと見る證空の考は、單に一代教が萬機を淨土教へ誘引する爲めの方便教と云ふだけの意味に止らずして、一歩進めて一代教其のものは、觀經なり。觀經其儘が一代教の一縮寫なりと見むとするものなり。故に祕決集一一二頁には、觀の字を釋して、

觀、一字ハ唯極慈悲來迎。而以此慈悲、一開九字（先勸等の九字）者念佛也。以三其九字一開十四行二者定數也。以三其定數一開七門二者玄義也。以三其玄義一開依文者一經也。以三其一經一開一代釋迦化前教也。其釋迦教開法界者往生衆譬也。以三其衆譬一教往生者彌陀教也。故初從觀、一字彌陀來迎種子。終至衆譬彌陀教。惣世間出世間善惡二法以三彌陀



陀<sup>ニ</sup>爲<sup>レ</sup>體<sup>ト</sup>教<sup>ニ</sup>出離生死往生極樂<sup>ニ</sup>故<sup>ニ</sup>言<sup>ニ</sup>十方佛土中唯一乘法<sup>ト</sup>極<sup>ニ</sup>彌陀一佛<sup>ニ</sup>故也。

と云ひ、同三四九頁下には、

一代<sup>ヲ</sup>皆攝<sup>ス</sup>于觀經<sup>ニ</sup>慈悲<sup>ニ</sup>而淨土<sup>ノ</sup>慈悲一宗<sup>ノ</sup>外<sup>ニ</sup>爲<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>令<sup>メ</sup>有<sup>ニ</sup>一代漸頓之諸教<sup>ニ</sup>也。

と示し、而もその次上四八頁下には、

淨土宗義<sup>ハ</sup>永<sup>ク</sup>異<sup>ニ</sup>諸宗<sup>ノ</sup>廢立<sup>ニ</sup>。諸經觀經<sup>一</sup>同<sup>ニ</sup>而衆無<sup>ニ</sup>非<sup>ニ</sup>他宗<sup>一</sup>云々。

と、又同次下の三五一頁下には、觀經は二藏なり二教なりと示し、

觀經卽頓教<sup>ナレバ</sup>者諸經收<sup>ニ</sup>于觀經<sup>ニ</sup>也。乃至觀經之二藏<sup>ニ</sup>攝<sup>ニ</sup>于諸經<sup>ニ</sup>也。二教<sup>モ</sup>亦如<sup>レ</sup>是。漸頓卽觀

經也。今何<sup>ノ</sup>教<sup>ヲ</sup>收<sup>ル</sup>故<sup>ニ</sup>一代<sup>ノ</sup>漸頓<sup>ヲ</sup>有<sup>ニ</sup>云<sup>ニ</sup>觀經<sup>ニ</sup>之意<sup>上</sup>也。

と云へり。羅注十一八〇頁上の釋又此に同じ。其他秘決集三五二頁下に、玄義七門を以て、觀經に一代の諸經を攝すとなし、八講論義一六頁、羅注八一四九頁には、一代を觀經の五義に作ると云へり。今此等の釋義はすべて其の事相鈔特有の特殊法門と關聯して釋せらるゝが故に、或は慈悲・智慧とか、或は定散・念佛・來迎とか、所謂特殊の用語の出づるを認むるが、その要は觀經を以て一代の諸經の衆てを統攝せむとする考の發露なることは容易に推定さるゝなり。卽ち釋迦の一代教（其體定散）を收縮したるものが觀經の化前序、更に此を縮めて彌陀教の眞實義を詮するものとして開顯されたものが卽ち一經の正宗に釋迦が説きし定教二善にして、此の釋迦教二善を能詮として詮はされたるも

のが所詮の弘願即ち彌陀教に外ならず、而も此の眞實義を證得する智慧が他力の觀智に外ならざれば行者の能證の義邊に約すれば、觀經一經は觀の一字に歸すると共に、此の觀智に依りて弘願の眞實體を證顯すべきものなれば、觀そのものは實に彌陀來迎の種子なるべきなり。而して宇宙法界の眞實體を彌陀來迎の尊體に於いて認むる證空の所謂特有の思想に在りては、此の觀の一字が彌陀教の眞實體の種子ならば、此れを開けば法界人のものたるべく、法界、釋迦教、彌陀教、觀の一字、其はすべて彌陀一佛に極る所は一乘法の意義も認められ、所謂衆譬法門の眞意義も此處に洞察され得べきとは證空の釋意たるなり。

而して此の觀經を以て直ちに一代教そのものなりと立つる意は、觀經の正宗に説く所の定散法を以て一代教なりとし、一代教に説く定散諸善と觀經に説く定散諸善とは、自力他力の區別こそあれ何れもその行體を論ずれば一分も變ることなしと釋成せむとするが證空の釋意なることは、かの自筆鈔に於ける有名なる一特殊法門たる行門、觀門、弘願の三門の關係を論ずるに當りて、行門の定散二善と觀門の定散二善とを同體なりと論定する論義に徴しても、充分認め得られる所なり。今祕決集第八一七三頁上を播くに、觀經の化前序には唯二衆を列示するのみにして、その教益の何たるかを示さざるを所にその義を知るべき旨を論じて、

化前ニ舉ニテ一代教ノ正宗ナリ。又説ニ觀經ノ定散二者、觀經ノ正宗ノ外諸經ハ成ニテ別經ト。可レ雙ニ一經ト。其

時者如<sub>ニ</sub>諸宗<sub>ノ</sub>爭<sub>ヒ</sub>。立<sub>ニ</sub>大小漸頓權實顯密<sub>ノ</sub>。各<sub>ノ</sub>爲<sub>ニ</sub>聖道淨土二宗<sub>ノ</sub>。而可<sub>レ</sub>雙<sub>レ</sub>肩。其時<sub>ハ</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>立<sub>ニ</sub>衆譬<sub>ノ</sub>法門<sub>一</sub>。乃至<sub>ニ</sub>今觀經<sub>ノ</sub>定散<sub>ノ</sub>外<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>在<sub>ニ</sub>諸經<sub>ノ</sub>法門<sub>一</sub>。而從<sub>ニ</sub>住立<sub>ノ</sub>佛體<sub>一</sub>造<sub>ニ</sub>出<sub>ス</sub>除苦惱法<sub>ノ</sub>定散<sub>一</sub>。是<sub>ヲ</sub>爲<sub>ニ</sub>化前一代<sub>ノ</sub>教<sub>一</sub>時。世間、出世、一分<sub>モ</sub>不<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>有<sub>ニ</sub>觀經<sub>ノ</sub>外<sub>一</sub>。而一切皆令<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>從<sub>ニ</sub>衆譬<sub>ノ</sub>而立<sub>ニ</sub>淨土一宗<sub>一</sub>也。

とあり。此れ全く一代教を以て觀教の定散となすものなり。同八一八四頁下の釋亦此に同じ。されば上來の所論によりて證空の釋意を決するときは、聖淨二門の關係は、歸する所唯念佛一道なりと見るものにして、此の弘願他力の念佛一行を開顯する爲めに一切の定散諸善の教は存在するものにして、此れ即ち廣く言はゞ一代教そのものと見るなり。故に此の見地よりして論するときは、一代教に説く諸行、即ち定散の諸善は、強ち捨つべきものにあらざと爲すなり。觀經の定散と一代とを一體せしむるは、雜善(自力の機情を以て修する諸善を指す)に對して念佛を讚する爲めなり。若し諸經を下々最惡として捨つれば淨土一宗の觀經には一切を納め難きこととなる。取る方より云へば、諸善念佛は皆上なり。捨つる方より云へば機の三業の行を捨て、佛來迎の行を取るべきなり(羅注第八、一四九頁下の文取意)とは、證空の釋意たるなり。

要するに、證空は既に上にも論述せしが如く、その一方に聖淨二門を相對的に認めて、此を何れも證果に到達すべき異りたる道なりと認め、其の上に難易の廢立義を建立して、聖道門を捨て、彼

土往生易行の淨土門を立したるものなるが、今此に至りて此等の明なる諸釋文を基礎として、其釋意を考察する時は、念佛一行を以て一切の行を統攝し、念佛の實義即ち慈悲來迎の尊體を以て、一代教は始めて眞實意義を認めらるゝものなりと釋せし事は、明に聖淨二門を二種の佛道とは見ずして全く一種の佛道と認めしものなる事は今や疑なき事實にして、此れ即ちその絶對論と予が名けむとする所なり。故に此時は、全く聖道教に於いて得益ある事を許さず、得益は淨土教に於いてのみなすとなすなり。従つて此に聖道教方便淨土教眞實說を生じ來るものにして、聖道の諸行は、唯念佛一法の開顯に過ぎずと云ふ事を意味するに至るものなり。故に彼は一代教を全く化儀方便と迄云ひ（秘決第五 二二〇頁下）、又淨土の法門は、聖道諸宗の外に別の法門をも立せずとも（密決一一〇頁下）淨土の一宗に諸宗を攝すとも云へるなり。而して、「淨土家の廢立は、佛は彌陀に極りて二佛なく、淨土を極樂に極めて二の淨土なく、往生の行を念佛に窮めて二なし、法華に十方佛土中唯一乘法無二亦無三除佛方便說と云ふ、此れ來迎を一乘法と云ふなり。法華は衆善の名言を説かざれば一乘法と云ふなり。無二とは念佛なり。無二とは定散なり。今此義に依りて選擇と云ふなり。是れ三身門の智慧を簡んで超世の慈悲を以て一乘と云ふなり。淨土は所誓を造るが故に、一乘の佛と爲すべきなり（此の來邊、念佛、定散の三名目は、次第の如く自筆鈔に在りては、弘願、觀門、行門の三重に配當シ得べきものにて、事相部鈔に於ける一特殊名目なることは、此に論ずるまでもなし）」と、密要決一 二〇頁に云へるは、蓋し證空の二門

論に於ける結論とも云ふべき語なり。而してその所謂慈悲來迎の彌陀一佛は此を往生の行本を以て詮せば念佛一行なるが故に、此の念佛一行を以て彼が法界全體を説明せむとする所に、吾人はその絶對論的批判の鋭き事を認められる、也。

されば上來の所論を要約するとき、證空の二門論には、相對的には二門の兩實を認めて其上に廢立をなす一面と、又絶對的には念佛一法に一切の教法を攝入して、定散行門の自力を以て來迎弘願の前方便となし、一代敎は一道也と認め、而もそれが唯一實在の他力念佛の行信義に會入されし上は、法界は念佛一行となり終り、今迄は方便なりと見し諸行もそのまゝ念佛となり、念佛即諸行なりと云ふ歸結に到達する一面と、此の兩方面の釋あることが知らるゝなり。而して後者即ち此の絶對的敎判が正しく證空の敎判論の結論にして、而も此がその一代佛敎に對する彼の批判の中心點なることを思ふなり。されば此の敎判論よりして進みたる彼の行信論に於いて、諸行念佛の關係を論するに當りて、自力の諸行を捨て、他力の諸行をとり、他力の諸行、即ち定散二善の行が、弘願他力の來迎の體を詮顯する能詮の行法と認められ、その定散二善と念佛弘願とは一體に歸して詮れし場合、換言すれば他力の信心決定せし證得往生の領解心の上において、念佛即諸行と和會され此に稱名念佛の一行と諸善萬行とは同一價值の行として、寧ろその往生行としての兩實を認定さるるなり。而して此の場合、證空の考にありては、その定散の諸行は全く淨土敎の行にして、既に聖

道教の行とは名け難しと爲すなり。然し乍ら此の淨土教の諸行諸善とその聖道教の諸行諸善とは、行體其のものを論すれば全く同一の行に外ならず。故に一度相對論に於いて兩實と建て、而も其の間に廢立を以て廢せし所の聖道教の行、又絶對論に於いては、始めは方便の善として捨てられ、教益無き行として認められたる聖道自力の行は、一度他力の領解心の成せられたる上よりは、何れも共に淨土門他力能詮の行として、換言すれば弘願念佛の上の行として、其は何れも復活され行くものにして、此處に所謂西山特有の傍正開會の教義が成立さるゝなり。故に翻つて冷靜に此間の義脉を論究すれば、實に證空の見解にありては、聖淨二門は兩實にして、而も其二門の行業としての諸行と念佛、其は又兩實のものなるべきが故に、假令入信の始に當りて、其の間に廢立の義が認めらるゝとは云へ、一度他力の眞實義を證得したる領解心の成就の上に於いて、此が開會を認むるときは、全く同價值のものとして其は復活し得べきなり。故に吾人は、廣大なる證空の念佛を以て、佛法を統攝せむとする此思想にありては、彼が一代佛教は念佛一法の外なしと云ひ乍ら、其の一面に二教の兩實を主張する事の亦所以なきにあらざることを此處に首肯し得るものなり。されば彼の教判論上、相對的には、聖淨二門二道の實在することを立し乍ら、その絶對的主張を爲す場合には、全く一道の實在を立說することは、其は一見、恰も其の教判論の型に於いては我祖聖人の教判に極めて相近きものゝ如くなれども、其の主張せる絶對的淨土教、即ち彼が依りて以て一宗を立する所

の他力弘願の念佛一道の往生教論たるや、其の内容に至りては、上に論究せしが如く、念佛即ち諸行と立て、傍正和會の義を強く主張するものなれば、吾祖の純弘願他力の念佛義が立派に諸行を廢捨し終りて、再び此をとらざるものとは、彼此其の念佛行そのものゝ意義に於いて全然根本的相違の在る事を注意せしめらるゝなり。

### 五、證空の二尊教論

證空の教判論の歸結が二門を一道と認めむとするものならば、此と關聯して、此に淨土教理論上には、釋迦教と彌陀教とにつきての見解を、一往論究する事の必要を想はしめらるゝなり。何となれば此土入聖を旨として此土に於ける得果成佛を説く聖道教と、弘願他力によりて往生淨土以て彼土成佛を期する淨土教との關係が深きものとせば、釋迦佛を中心として論せらるゝ釋迦教と、彌陀佛を中心として論せらるゝ彌陀教、即ち二尊教の關係は此れ亦深きものとして詮はるべきは當然なり。況んや二尊教の意義が、淨土各宗の祖師方に依りて、各々相違ある解釋を施さるゝに於いておや。依りて今證空の觀經祕決集に依るに、かの玄義分の今乘二尊教廣開淨土門の釋には、次の如く二尊教者衆譬<sup>〇</sup>、定散也<sup>〇</sup>。法界<sup>チ</sup>爲<sup>レ</sup>智<sup>ト</sup>。衆譬<sup>チ</sup>爲<sup>レ</sup>悲<sup>ト</sup>。故云三尊教<sup>ト</sup>。廣開淨土門<sup>ト</sup>者。慈悲<sup>門</sup>ナリ。廣開<sup>ハ</sup>入<sup>ル</sup>、十方衆生<sup>ニ</sup>也。

と云へり。此の釋は事相鈔特有の名目を使用せる釋文として、其は一見極めて難解の文なるが、若

し此文が、かの證空特有の思想、即ち一實眞如法界の悟界に、迷へる凡夫衆生を悟入せしむるが爲に、釋迦の一代佛教は、所謂能詮衆譬の法門として存在するものと見る考より出でしものとせば、法界の如實相を説示する爲に衆譬の定散を佛がつくり、他力來迎の慈悲の體に十方衆生を引入する爲めに、彌陀釋迦二尊教はあるものと云へる釋なるべきなり。故に同第三五三頁下の説人門の釋下には、

序題門ニ一代教者依ニ韋提請ニ云フ開ニ要門定散ナリ。

説人門ニハ一代造リテ五種ニ。皆言ニ自説ニ定散ナリ。

是則序題門ハ釋迦教ノ定散也。是爲ニ智慧ト。定散俱爲ニ能譬ノ智慧ト。故ニ云ニ定善經ニ。

説人門ハ爲ニ彌陀教ノ定散ニ。是爲ニ慈悲ト。定散俱爲ニ所譬ノ慈悲ト。故云ニ散善經ト也。

定散共ニ爲ニ定善ト爲ニ能譬ノ智慧ト者。假令ハ如ニ油ヲ與炷。油炷各別ノ者。共ニ無ニ利益。故ニ油ハ

能譬也。炷ハ所譬也。能緣所緣寄リ合テ作ニ利益ニ之時者。俱ニ所譬也。俱ニ相ニ合シテ一切ノ物有リテ現ニ

有ニ利益ニ者是云ニ所譬ニ。是云ニ散善ト。能緣所緣互雖レ有ニ其利益。不レバ相合ニ者無レ現ニ。無ニ利益ニ。

然シテ而無レバ其德ニ者是レ定散共ニ云ニ能譬ノ智慧ト也。極樂者所譬、娑婆者能譬也。是各別ニシテ而不レ知ニ

衆譬ノ利益ニ也。能謂自開各別也。所譬、體屬ニシテ能譬ニ有レ現ニ有ニ利益ニ。是屬ニシテ油炷ニ作レ光ニ云ニ利

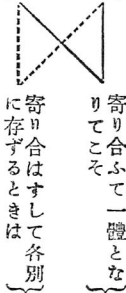
益ト。以ニ此レ屬スルテ利益ノ方ニ爲ニ説人門ノ自説ト。以ニ其ノ油炷ニ爲ニ各別ノ方爲ニ能譬ノ要門ト。



とあり、此釋は證空が觀經に於いて韋提致請の邊は行門自力定散の位なれば、未だ他力の存する所以を知らざる位なり。即ち序題門に一代教をば韋提の致請に依り要門散と開くは此の意なり。然るに佛が韋提の請に依りて漸次機縁の醇熟を認め給ふや、佛力の觀として十六觀定散を自說せむとし給ふ。此の自說の義邊につきて定散の位を見れば、其は全く他力の觀門として所詮の弘願を顯はす能證の定散たるべきなり。故にかの事相部の鈔に於ける特殊法門たる定散・念佛・來迎の三位に之を配すとせば、初の韋提致請の義邊の定散は自力定散位の定散と云ふべく、後の觀門能證の定散、即ち佛自說の義邊に於ける二善は全く他力念佛位の定散と云ふを得べきなり。而して此等の考を中心として、此に二種の定散を分別するが故に、此の韋提致請の行門位の定散は一代教當分の定散として此を釋迦教の定散と稱し、次に所謂佛の自說と説く説人門の義邊、換言すれば他力觀門位の觀經正宗の定散は、此を彌陀教の定散と稱し分くるなり。而して此を佛陀教説の根本より深く論究すれば釋迦教即ち聖道教は、やがて彌陀教即ち淨土教の實義を開顯し説き詮す爲めのものなれば、此を衆譬法門の能所を以て論ずれば、釋迦教定散は能譬の定散にして智慧の別に配すべく、彌陀教定散は所譬の定散にして慈悲の位に配され得べきなり。而して此の二者を今の釋には、更に定善經散善經といふ一種の對目を以てせることは、所謂觀經序分に於ける韋提の致請定善の自力の行門位と佛の自開散善の他力觀門位との兩位を對望して作語せる名目たることは、證空の鈔を讀むものゝ等しく

認め得べき事と信するなり。而して此の行門、觀門。定善經、散善經。智慧、慈悲等の特殊名目を以て詮さむとする釋意は、やがて兩者の一體なることを主張せむとする意より出しものなれば、此を能譬、所譬の關係に於いて論述し、更に火炷油の喩を以て、炷油一體なる所に火光の利益ありと述ぶる所に、彼の釋意を容易く捕へ得べきなり。即ち炷と油とが別離して在らば永久火炷には火光の利益あらはるゝなきが如く、能譬と所譬とが獨立して別在せば、其は何等意義なきものと云ふべし。智慧の能譬が慈悲の所譬と一體なる所に所譬の慈悲の何たるが顯示されて、その利益は全うさるゝなり。即ち今も釋迦敎定散の能譬と、彌陀敎定散の所譬とが一體なることが明になりてこそ、彌陀敎定散そのものゝ何たるが顯示されて、同時に彌陀敎の實體なる弘願の體、即ち來迎利益はやがて顯示すべし。尙此の能請智慧定善經と、自開慈悲散善經と云ふ特殊の對目の意義につきては、祕決第六一二五頁上、同第八一八三頁上、羅注第五八三頁上、密要決第二三九頁上、同第四六六頁上等の釋文を参照すれば、能くその釋意と用語の目的とを推測し得べしと信す。

釋迦敎の定散——定善經——智慧——能譬——油  
彌陀敎の定散——散善經——慈悲——所譬——炷



寄り合ふて一體となりてこそ  
寄り合はすして各別に存ずるときは

所譬即他力慈悲の體を顯して利益（火光）あり。能請と自開の目的達す。  
能譬即ち自力智慧に留りて利益（火光）あらはれず。能請と自開と各別に存することなるべし。

以上の諸釋、證空は諸種の特種名目を以て説明するが故に其の意義を明瞭に捕ふことは至難の事なるが、然し吾人は此等の名目を以て複雑なる釋義を施すその文裏に詮はるゝ彼の釋意を、その思想全般よりして論定し、以て此を考察するときは、此等重々なる特種名目を用ゆる所以は、全く釋迦及び彌陀敎即ち聖淨二敎は行體を以て論ずる場合は、二者全く相異なるものにあらざることを示さむとするものと知らるゝなり。要は唯自力の機情を拂ひ去りて得たる他力領解の上の定散二善に依りて、弘願念佛の一行を認むとするが一代佛敎の歸結なりと見しものにして、聖淨二敎の存在する所以も、釋迦敎彌陀敎の存在する所以も、全く此の一大事の爲なりとするものならざるべからず。従つて證空に在りては、假令能譬釋迦敎に依りて所譬の彌陀敎を開顯せむとすることが佛敎の本意を認むと雖も、彌陀敎の開顯されし上は、釋迦敎そのものは此を捨て去るべきにあらず。捨つべきものは唯單に行者の自力の機情に外ならず、此の情執が一度除かれし上は、釋迦敎彌陀敎は一體になりて、眞實法界の全體が一大念佛行者として認めらるべきものと立て、所謂此の**大念佛の一法**を以て法界を統攝せむとするがその證空の中心思想たるなり。故に此の二尊敎論に於ける結論は歸する所念佛即諸行と云ふ觀念に到達するものにして、此れ即ち二尊敎論に於いて釋迦敎の定散、彌陀敎の定散なる名目の生じ來り。二尊敎は相○寄○り○合○ふ○て○ど○か、或は相○合○して○所○譬○を○詮○す○と○か○云○は○ざるべからざるに至りし所以にして、此の場合此の二尊二敎説は全く合體の一敎説として現れしものな

ることを注意すべきなり。而して此れが、今家我祖にありては、觀經の要門と大經の弘願とを以て二尊二教の義を立て、而も其處に二尊一教の旨を立て、發遣と招換との一致を説き示す善導の釋意を承けて、釋迦教八萬四千の法門を淨土教門にとり入れて此を方便教と立て、行法そのものまでをも廢して、純一彌陀弘願他力の教義を建立し、而も其が直ちに二尊一教也と釋成し、廢立そのものが全く二尊一致の眞精神なりとして、眞宗義を樹立し給ふとは、彼と此と、兩者思想上並に釋義上には大に異りあることを想はしめらるゝなり。而して此の證空の考は此れ亦、後に彼の西谷義の大成者行觀に至りては、その著私記に（玄私記一六十一丁）於て、盛に定散そのものゝ上に喚遣に約して二尊一教の旨を立て（玄私記四二三丁）、聖淨二門寄り合ふて一頓教一乘海と爲すと強く主張するに至りし思想上の連絡なることをも注意さるゝなり。

而して證空の此の二尊一教説は云はゞ合體の一教なるが故に、その始に中りては、釋迦教と彌陀教とは各別の對立を見るべきものとなり、二尊二教は各別なる故に此の二教が合體して詮はるゝ所に淨土教の實義が正しく開かれ來るものと見るなり。祕決集第五一九頁上を繙くに、證空は左の如く論述せり。

如ニ序題門ノ者。分ニ二尊兩部ニ教外ニ造ノ教也。是依ニ彌陀ニ依ニ弘願ニ故ニ離レテ釋迦尊ノ教分ニ

此は序題門諸經當分の位にては、二尊教の對立することを認め兩部の教と立つるなり。祕決第十

二三頁上の釋又此と同意を示せり。

注意！ 此の證空の考は一代教を諸經と觀經との對立に分ち、智慧の諸經は玄義分の七科の上にては序題門の釋、慈悲の觀經は説人門の釋意に當れりとして釋成するが秘決集の見方なり。委細は秘決第十三（二九七頁上）を參照されむことを乞ふ。

而して此が説人門觀經當分の位に於いては、二尊教は一體一教と説き示すか玄義分に於ける善導の一代教に對する見解なりと見るなり。されば彼は次下秘決集第五二〇頁下には、

玄義彌陀教ノ慈悲ト與ニ一代釋迦教ノ智慧ト 覺ニ悟ニシテ 一同ナリト。證下スルチ從ニ彌陀ノ本願ノ教ニ顯中スト三世諸佛利生ノ方便上チ。名ニ一僧指授ノ玄義ノ法門ト。

と論せり。羅注第七一二五頁下の釋、亦此に同じ意を示せり。されば以上二尊兩部教の上に、二尊一教を建立し、聽て佛法を一大念佛を以て釋成せむとすることが實に證空の始終一貫せる思想なることが知らるゝなり。

以上は主として事相部の鈔中に於ける二尊教觀につき研尋を試みて論成せしものなるが、更に教相鈔に就き一應此と同様なる釋義を尋ねしに、又二三の文證を得たれば、煩しけれども左に掲ぐるごとゝせん。即ち玄義他事鈔上三六頁下を見るに、先づ

以ニ定散之ニ善一。爲ニ極樂之要門一。是ハ釋迦教也。以ニ念佛一行一爲ニ別意弘願一。是ハ彌陀教也。

と二尊二教の別ある事を説き、然も此の二教は各別獨立して永く存在するものにあらざれば、要は

一教なるべきものなることを力説せり。その釋文極めて長くして、煩しき恐れあれども、證空の釋意を知る爲めに此を出せば(同三七頁上)

設<sup>ヒ</sup>云<sup>フ</sup>トモ釋迦ノ教<sup>ナリ</sup>ト。可有<sup>ニ</sup>釋迦ノ說<sup>ヲ</sup>分<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>取<sup>レ</sup>之<sup>位</sup>。又雖<sup>ニ</sup>彌陀ノ本願<sup>ナリ</sup>ト。可有<sup>ニ</sup>釋尊ノ說<sup>ノ</sup>位<sup>ニ</sup>テ定散ノ上<sup>ニ</sup>可<sup>レ</sup>立<sup>レ</sup>之<sup>位</sup>。所謂爲<sup>レ</sup>題<sup>ニ</sup>欣淨緣ノ密益<sup>ナ</sup>。韋提請<sup>ニ</sup>思惟正受<sup>ヲ</sup>定善<sup>ナ</sup>。佛自<sup>ニ</sup>開<sup>シテ</sup>散善<sup>ヲ</sup>顯<sup>シ</sup>定散齊<sup>シ</sup>生<sup>ル</sup>、謂<sup>チ</sup>而<sup>ル</sup>ニ定散等<sup>シ</sup>生<sup>ルト</sup>。唯<sup>ニ</sup>定散<sup>ノ</sup>位<sup>ニ</sup>謂<sup>レ</sup>テ失<sup>シ</sup>此法財<sup>ト</sup>無<sup>レ</sup>生<sup>ル</sup>時。不<sup>レ</sup>失<sup>シ</sup>此法財<sup>ノ</sup>之<sup>行</sup>アリ。爲<sup>レ</sup>汝說<sup>ント</sup>シ玉ヒシ時<sup>ニ</sup>應<sup>ニ</sup>此音<sup>ニ</sup>。空中<sup>ニ</sup>三尊現<sup>シテ</sup>顯<sup>シ</sup>別意<sup>ヲ</sup>弘願<sup>ナ</sup>。是即釋尊ノ說<sup>ニ</sup>說<sup>キ</sup>位<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>出<sup>シ</sup>定散ノ位<sup>ナリ</sup>也。不<sup>ニ</sup>待<sup>テ</sup>釋尊ノ言說<sup>ト</sup>空中<sup>ニ</sup>現<sup>シ</sup>玉フ是念佛三昧ノ宗體也。依<sup>レ</sup>之立<sup>ニ</sup>三尊教<sup>ノ</sup>也。所謂釋尊說<sup>テ</sup>定散二善<sup>ニ</sup>顯<sup>シ</sup>極樂<sup>ヲ</sup>依正二報<sup>ト</sup>使<sup>シム</sup>人<sup>ナシテ</sup>欣<sup>バ</sup>彌陀顯<sup>ニ</sup>別願<sup>ヲ</sup>於空中<sup>ニ</sup>爲<sup>ニ</sup>凡夫<sup>ニ</sup>現<sup>シ</sup>玉フ是以爲<sup>下</sup>異<sup>ナル</sup>諸經<sup>ニ</sup>今經<sup>ノ</sup>詮要<sup>上</sup>也。

と、二教の分齊を明示したる後、次下には、

釋尊ハ穢土ノ教主也。向<sup>ニ</sup>五乘ノ機<sup>ニ</sup>說<sup>キ</sup>玉フ大小乘ノ法門<sup>ナリ</sup>。是即三身之中<sup>ニ</sup>化身ノ佛也。今弘願者。本願、酬因ノ報佛ノ別願也。何<sup>ゾ</sup>三身中<sup>ニ</sup>化身ノ位<sup>ニ</sup>顯<sup>シ</sup>之哉。依<sup>レ</sup>之顯<sup>シ</sup>示觀<sup>ニ</sup>領解<sup>ヲ</sup>四十八願密益<sup>ニ</sup>時。入<sup>テ</sup>三身同證<sup>ノ</sup>位<sup>ニ</sup>正因佛體ノ位<sup>ニ</sup>。共<sup>ニ</sup>謂<sup>ニ</sup>法界身<sup>ノ</sup>時。法界身ノ位<sup>ニ</sup>化身<sup>ニ</sup>說<sup>シ</sup>顯<sup>シ</sup>彌陀ノ別意<sup>ヲ</sup>弘願<sup>ナリ</sup>也。此時云<sup>ニ</sup>定散ノ上<sup>ニ</sup>弘願<sup>ナリ</sup>。又云<sup>ニ</sup>ハル緣ノ上<sup>ニ</sup>化身ノ行<sup>ナリ</sup>也。此位<sup>ニ</sup>テハ雖<sup>ニ</sup>釋尊ノ說<sup>ナリ</sup>ト。猶云<sup>ニ</sup>ハル彌陀教<sup>ト</sup>也。法界身ノ佛ノ說<sup>ナリ</sup>故<sup>ニ</sup>。此謂<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>顯諸經ノ面<sup>ニ</sup>。雖<sup>レ</sup>說<sup>ク</sup>彌陀本願<sup>ト</sup>不<sup>レ</sup>出<sup>シ</sup>三身ノ第三化身ノ位<sup>ナリ</sup>也。

雖<sup>レ</sup>立<sup>ニ</sup>他力<sup>ニ</sup>尙<sup>ニ</sup>自力<sup>ニ</sup>難<sup>レ</sup>成<sup>ニ</sup>凡夫<sup>ノ</sup>出離<sup>一</sup>。

と云ひ、然らば二尊二教にあらずして、彌陀一尊教と云ふて可なりやに就き、

可<sup>レ</sup>有<sup>ニ</sup>而<sup>ル</sup>意<sup>モ</sup>。但<sup>シ</sup>云<sup>フ</sup>法界身<sup>一</sup>。三身ハ共<sup>ニ</sup>位各別<sup>ニ</sup>シテ而隨<sup>ニ</sup>機<sup>ノ</sup>淺深<sup>一</sup>顯<sup>レ</sup>佛也。示<sup>○</sup>觀<sup>○</sup>三身ハ三身

共<sup>ニ</sup>向<sup>ニ</sup>惡凡夫<sup>一</sup>顯<sup>ニ</sup>別願<sup>一</sup>。如<sup>レ</sup>此意得<sup>ス</sup>雖<sup>レ</sup>入<sup>ニ</sup>法界身<sup>一</sup>位。又云<sup>ニ</sup>娑婆化主<sup>一</sup>。不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>失<sup>ニ</sup>第三之身<sup>一</sup>、

位。仍同<sup>ク</sup>法界身<sup>ノ</sup>位<sup>ナガラ</sup>而云<sup>ニ</sup>二尊教<sup>一</sup>也。

と云へり。而して二尊の位然らば何等の差別ありやにつき、

云<sup>ニ</sup>娑婆化主<sup>ニ</sup>面<sup>ハ</sup>。以<sup>レ</sup>說<sup>○</sup>顯<sup>ニ</sup>彌陀<sup>ノ</sup>願體<sup>ナ</sup>。云<sup>ニ</sup>安樂能人<sup>一</sup>面。第七觀<sup>ニ</sup>現<sup>ニ</sup>佛身<sup>一</sup>顯<sup>ニ</sup>別願<sup>一</sup>。共<sup>ニ</sup>報

佛<sup>ノ</sup>別願攝<sup>ニ</sup>凡夫<sup>一</sup>也。

とあり。されば此等の釋示に基くときは、二尊一教の義が尤も完全に顯示さるゝは觀經にして、而も第七觀の住立空中の彌陀佛に依りて正しく二尊一教の分齊は顯示さるゝものと見るなり。尙自筆鈔にありては、玄自一二三頁上を披くに、釋迦の觀門と彌陀の弘願とに約して二尊教の義旨を説立し序題門の然娑婆化主等の疏文につき、玄自二三三頁下には、

化主<sup>ト</sup>能人<sup>ト</sup>互<sup>ニ</sup>稱<sup>ニ</sup>二尊<sup>一</sup>。謂<sup>ク</sup>能<sup>○</sup>化<sup>○</sup>主<sup>○</sup>能<sup>○</sup>化<sup>○</sup>人<sup>ナリ</sup>也。偏<sup>ニ</sup>爲<sup>ニ</sup>無善常沒<sup>ノ</sup>機<sup>一</sup>故<sup>ニ</sup>。還<sup>レ</sup>能<sup>ク</sup>普<sup>ク</sup>攝<sup>ニ</sup>善惡<sup>ノ</sup>機<sup>一</sup>盡<sup>ス</sup>。故<sup>ニ</sup>名<sup>ニ</sup>弘願<sup>一</sup>。弘<sup>ニ</sup>於廣開<sup>ノ</sup>要門<sup>一</sup>故也。

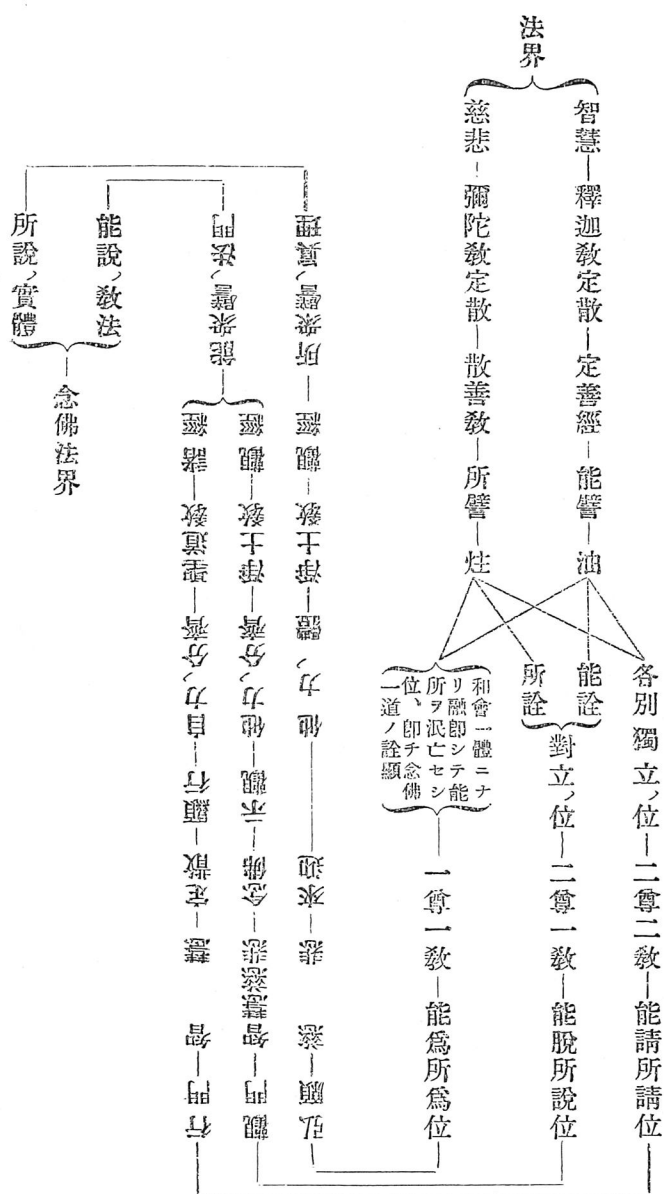
能請所請<sup>ハ</sup> 二尊二教<sup>ナリ</sup>。念佛觀佛各別<sup>ニ</sup>立<sup>スル</sup>故<sup>ニ</sup>。

能説所説ハ、二尊一教ナリ。觀佛ハ能詮ニルガ念佛ノ宗ニ故ニ。

能爲所爲ハ、一尊一教ナリ。釋迦ノ意密ハ同ニル彌陀ニ故ニ。

とあり。此れ恐く證空の二尊教論の結論を尤も簡明に説示したる語と謂ふべし。實に此の三重は次第の如く、自筆鈔に於ける行門、觀門、弘願の三法門に相當すべきものなれば、二尊教が漸次相寄り合ふて二尊一教として認められ、而も此に弘願念佛の一教開顯の上は、念佛一法の外に釋迦教の別立すべきものあることなく、釋迦佛そのものも彌陀佛一體に歸して別在せず、佛法は全く弘願一實道の開顯なりとして、絶對の天地を此所に見出し得べし。此の唯一絶對の見地に引導せむが爲めに釋迦一代の教法は開展されしものと見る考なり。故に此の絶對的見地に一度立ちて、此の廣遠なる念佛義よりして、弘く佛法を洞觀するならば、諸行諸善は即念佛一法の外なしと云ふ結論に到達し、正しく諸行諸善を弘願一乘海に引入和會することを得べきなり。此れ二尊教論が二門二道論の歸結と同一なる結果に至るべき所以とす。誠に上來の所述を作圖して示せば左の如き一圖を得べき歟。





## 六、行觀の二門兩實大不二門論と證空二門二教論の歸結

上來予は證空上人の述作上に於いて、その聖淨二門判、並に釋迦彌陀二尊教に就きての釋義の一を考察する所に、如上の結論を見出したるものなるが、更に西谷流行觀上人の述作たる、彼の有名なる五私記の上に於いて、證空上人相傳の義として行觀が釋成する所のものを以て見るに、稍此と義門の立て方に於いて幾分の相違あることが感ぜしめられたり。予をして論究せしむれば、行觀覺融上人に依りて、實は西山證空上人の釋義上、未だ不明瞭と認めらるゝ點が、寧ろ完全に補足されて、此にその大なる釋義が明確に表示されつゝあるが如く思はるゝなり。何となれば、其は他無し、行觀が玄私記一一四右には、西山上人の義は、聖道淨土二門兩實と立するものにて、若し一念義の人々の如く、八萬四千の諸教は方便不眞實と立て、觀經のみが眞實教にして、釋迦佛出世の本懷なりとせば、其は我が宗を立つる爲めに却りて聖道教を不眞實として謗ることゝなり。其は大なる謗法罪を構成するものなりと盛に立説することに依りて知らる故なり。即ち行觀は、聖淨二門の兩實論を強く立説する代りに、聖道教方便と云ふ説を非常に嫌いで此を否定せるゝなり。同一五九右、同玄私記二二三右、序私記一二〇右、選私記一三三右、三一〇右、四一五左、五一三左等諸處に此の義を述べ居れり。此の中、選擇集私記の方は、兩實論を出せども、未だ聖道方便を強く嫌ふ傾向現れ居らず、されども四私記の上にては盛に此を嫌斥せることが認めらるゝなり。此れ蓋し行觀の時代は強く一

念義に對向せむとする必要に迫られたるものありしによるべき歟。抑々行觀の釋意、即ち彼の淨土教義は、西山より淨音を経て相承されたるものにして、元祖の選擇集に於ける廢立、傍正、助正の三重につきても、選擇集の文面は横に並べる三重の法門と解釋さるゝのが通例なるに、彼は特有の见解を以て此を堅に解釋し、廢立、傍正、助正と、此の三重は堅に次第して往生淨土の義を表示すべきものとなし、此に所謂三重法相を組織し、同時に此の三重法相を以て、數相、安心、起行と次第に教義を釋示するものなるが故に、先教相門たる二門論に於いては、勿論廢立の義を立し居れり。即ち聖道門は難行道、淨土門は易行道と分ち、その難行自力の聖道門は之を廢し、易行他力の淨土門は之を立すべきものとし、此の難易廢立は即ち初祖龍樹以來次第に相承し來れる所の批判にして、列祖一轍の廢立と云はるべきものとなすなり。而して此の難易の廢立はかく列祖の等しく相承する所なりと雖も、其は唯修門の離易を分ちしのみにして、未だ淨土に通別の分ちある所以を認めたる廢立にあらざれば、此を淨土門初門の廢立となすなり。然し乍ら深く善導の釋義に就きて見るに、善導は觀經に於ける序分欣淨緣の五文につき、所謂通所求の淨土に對し、別所求の淨土の存在することを示し、定散の自力通去行の諸行に對し、他力別去行の行を説き分けて釋し、殊に玄義分には通別有異と示したり。依りて此通別相對の釋義を基として、此に廢立の義が更に一重認めらるべきなりとして、此を所謂通別の廢立と名け、自力定數の諸行と他力本願の念佛、又通途諸佛の

淨土と、別旨阿彌陀の淨土とを分別し、定散の諸行は自力の故に阿彌陀の本願の行に對すれば全非比較と廢し、唯他力本願の行一法のみは此を立すべし。此れ善導直説の法門にして、或は列祖異轍の法門としも稱すべきものなり。かの法然上人が選擇集の二行章に於いて示し給ふ往生行の批判も其は全く此の第二の批判の意に基きて示し給ふものにして、此こそ淨土門眞實の廢立と稱するなり。されば行觀に於いては、廢立に二重を立つることとなる。而して第二通別の廢立に於いて、其の行せむとする他力易行の淨土眞實の行は、全く自力難行の聖道諸行の外に別立するものなるが故に、假令二者の間に廢立を認むとは云へ、二者の眞實を否定せしむとするものにはあらず。飽くまで此の兩者は眞實ならざるべからず。換言すれば聖道淨土二門の行はたとひ其間に廢立を認むとは云へ永幼に眞實行として實在すと云ふが、實に行觀の二道二門兩實の強き主張なるなり。

而して次に、此の第二重の通別廢立の義の基く、觀經序分欣淨緣に於ける別去行の行、及び別所求の土なるものは、此が觀經の文面、序分より進むで正宗分に入れば、正しく定散十六觀の法門として説き開かれ、其はともに所謂佛體佛語の法門として説れたることを認めうるべきなり。換言すれば、異方便の敎説として、又廣説衆譬の法門として、弘願眞實の彌陀の佛體が、釋迦佛の佛語を以て此土大地の上に表現されたるものが認められるべきなり。故に此の佛語に就いて云へば、十六觀の法門、即ち釋迦佛の佛語そのものは、彌陀佛弘願の佛體そのものを説き詮すものならざるべか

らず。故にとりつめて之を論ずれば、實は此の能詮の佛語以外に佛體の詮顯さるべき理なし。さればにや、第七觀に進むや、所化韋提の前に除苦惱法の法體として、空中に現れ給ひたる弘願の佛體は、全く此の佛語の定散を能詮として詮された所詮の體に外ならず。能詮と所詮と一に歸したる所に所詮の體は實現す。韋提が空中の三尊を拜し得し所以は、全く此の能詮の佛語、所詮の佛體一なる所以を證得せし端的に感得せし所の實體ならざるべからず。故に能と所とは語の上では異なる存在の如きも、本來一體なるべきなり。別去行の行、別所求の土として説き開れたる十六觀定散の法以外に弘願の佛體現することなし。此の佛體を往生行として立つる所に、始めて自力聖道の諸行を捨て、他力易行の本願の行を立する謂れ立つと同時に、一度觀經正宗の教説に基き佛語佛體、能詮所詮の謂を識得する一念に、すべての定散諸行は他力往生の行としてその意義を認定され行くべきなり。故に次の傍正安心門に於いては、先の廢立門に於いて廢したる諸佛通之身門の上の諸行を、皆餘さずとりかへして、釋迦佛力、能詮要門の定散行として開き、此をすべて所詮顯の弘願の念佛の正に對して、能詮顯の觀門要門の傍と認むるなり。即ち觀經正宗分の文面に就きて此を見れば、定散十六觀は所終の行法として説かれたるにあらずして、弘願念佛一法を詮顯する爲めの能説能讚の二善法に外ならぬなり。此の二善法に依りて弘願の實體、即ち念佛の實體が詮顯さるべき故に、觀經には主伴の義にて兩三昧は立せらるゝなりと、此に經意に基きて立てしものが第二傍正の重た

るなり。故に上の第一重廢立位中の第二通別廢立の上に於て、自力諸行の聖道門を廢立して立てし所の別所求、別去行の淨土門内に於いて、更に佛語の能詮の定散と云ふ名目のもとに、かつて第一重にては自力聖道の行と云ふ名のもとに廢せし所の一切の諸善行を、此に再びとり替へして要門他力の行として此を攝し、此等一切の行に對して傍の名を與へ、所詮の弘願念佛の正に對立せしむるが第二傍正位なり。而して次に第三起行門の助正位に進むでは、更にこの第二重に於て他力の意義を證得し、正定業の念佛義を識得せし上は、他力の念佛は能詮の二善に依りて詮顯さる所以を、現實に起行門の上に實現すべく、安心より起門へと進み、三業の修行に出で、一は佛恩報謝の爲め一は自己が淨土にて成佛の時の内證外用の功德莊嚴の爲めに、四種の行、否三業の上のすべての行を修すべし。此が即ち第三起行門の意義なりと（選擇私記二六丁及び三十一右取意）、されば此等行觀の釋意にありては、始め敎相門に於いて廢立を談ずる場合には、二門二道の兩實を以て、而も其の上を一を自力門、一を他力門と分ち、通所求の自力行を捨て、別所去の他力を立て乍ら、次の安心門に入りて傍正を談ずる場合には、翻つて此の自力行として一度は捨てし諸行二善をば、かへりて他力を詮顯する行としてとりかへし攝し來るなり。即ち傍正安心門の上にありては、一度自力機執の情を捨て去り、他力機法一體の眞實義が證得され、弘願の行體が識知されし以上は、一切の諸行二善は、此の弘願一實の行體の具徳、否それがそのまゝ他力の實體を詮顯する行業として認めらるべ

きなり。廢立の位、過去行の行として此を捨て去る所以は、此の場合、一切の諸行を自力の機執、即ち聖道通途の情執を以て見るが故に、淨土門他力に歸入する初めに嚴しく此廢捨するなり。然し乍ら一度他力淨土門の眞實我が證られて、如實の弘願の體が、寧ろその二善一切の行業に依りて、證顯され行くべきものなることか識得さるゝ上は、此に他力の定散諸行として此をとりかへし、やがて起行門に趣きては、寧ろ此を勵み修すべきなりとは行觀の釋意たるなり。故に傍正の重に於ける傍たる能證の二善諸行と、廢立の重に於ける所廢の聖道門自力の二善諸行とは、行體そのものゝ上より論すれば何等異なることなく、正に諸佛も彌陀佛も認め給ふべき善行なり。ともに眞實の行業なり。故に定散の行そのものは何等廢すべきにあらず。此の定散の行が弘願の念佛を證顯するものなることを知らずして、徒らに自力機法各別の執心にとらはれて、法の念佛にかけ離れたる諸機各別の行として修するが故に、一度は聖道門自力の行として眞實淨土の御門に當りては廢せざるべからざるなり。故に廢捨せしむとするは全く聖道自力の執心そのものに外ならず、行體其のものは何等廢すべからず、永劫に弘願念佛海中の行として存在するものなりと、此に他力念佛義の見地よりして、その互融を強く主張せむとする本意なることが認めらるゝなり。故に彼の選擇集私記二六左を繙くに、

淨土要門ト云フ時<sup>ハ</sup>。不<sup>レ</sup>趣<sup>ニ</sup>行門<sup>一</sup>上<sup>ニ</sup>。雜行ト廢ツル物ヲ取<sup>リ</sup>替<sup>テ</sup>。所說<sup>ト</sup>定散異方便<sup>トイフ</sup>時<sup>ハ</sup>。萬機<sup>ノ</sup>品<sup>ニ</sup>說

返ス也。乃至如レ此衆機ニ調定散萬機無隔攝取シテ彌陀願力ト云フ事說顯ス佛語ノ所說之定散要門ト云フ  
時ハ言ニ定散文中唯標專念等一位ヲ說ニ觀經ノ十六定散ト也。乃至此時定散ハ爲ニ能讚ノ要門ト說ニ顯ス念  
佛一故ニ。定散ハ云レ傍ト念佛云レ正ト。故云ニ傍正ト主伴ノ義ニテ立ル兩三昧宗一位也。此時ハ不シテ廢ニ定散一  
攝スル故ニ云ニ要門ト也。

と云へり。即ち行法そのものは廢すべきにあらざれば、次の助正門の起行位に來りては、すでに前  
の安心の位たる傍正門に於いて、一切の諸行二善は念佛に和會されて、念佛一法を說顯する行法と  
して認められ、念佛海中に攝在するが故に、今は此を再びその弘願念佛海中より開き出し、安心の  
上の記行の行として復活せしめ、或は報恩の爲め、或は自の佛果莊嚴の爲めに勵み修し行くこと、  
なるものなり。畢竟するに行觀の釋意は、弘願の念佛と云ふ義を以て、定散二善一切の諸行が、往  
生の行として立つべき意義を認め行くことの始終を説明するにつき、此に廢傍助の三重法門を立て  
教相、安心、起門と次第して、此を巧に説明するものにして、此點は全く西山證空上人の一代教觀  
並に二善念佛觀と異なることなしと云ひ得るなり。然し乍ら此に予をして特に言はしむれば、行觀に  
ありては、上にも云ふ如く、明に二門兩實論を立て、而も聖道方便説を立つることを嫌ひ避け居る  
ことは、西山上人に一步を進めたる點なりと考へらるゝなり。即ち難易、通別の二廢立を立つれど  
も、聖道教を何處までも眞實として認め、決して方便の語を冠せて此を捨てず、常に二門二道の證



果の各實在することを認めて、其上に廢立の義を立て、而も遂に第二重傍正の位に至りては、その行を淨土門の行としてとり入れ和會することなり。故に選擇集私記全般に亘りても、彼は常に、今家法然上人は廢立を正とするが故に、二門を別道として廢立せざるべからずと主張するなり。而して此れやがて、四私記の上にては、明に聖道方便説を全く否定せざるべからざるに至りし所以なりと同時に、又一面より考察すれば、其は次の第二重安心の傍正の重に至りて、やがて諸行念佛の和會を強く主張し、その論旨を明確ならしむるが爲めの、釋義上の伏線なりとも云ひ得るなり。即ち聖淨二門は兩實なるが故にこそ（教相）、傍正に諸行念佛を和會し（安心）、助正に此を勤修し（起行）得るものなり。西山證空上人にありては、一度は聖淨二門を相對的に釋して、二門二道の各々證果のあることを明して、難を捨て易を取るべき旨を示し乍ら、絶對的に二門一道なりと論定する場合には却りて聖道方便説をとり來りて、而も和會の義を説き、二尊二教は二尊一教となり、やがて一尊一教に結歸すべきものとなすなり。證空が明に聖道方便説を主張することは、上に委細に論定する所の如し。二門兩實にして而も後に聖道方便説を主張して、やがて此を和會するは西山なり。故に其釋義の上には、幾分の矛盾、否寧ろ不明瞭の點ありと云ふことを得るなり。傍正に和會して念佛一法を以て一を以て一切法を説明し盡くしたる釋義の歸結及びその念佛一類の信念は、略西山と鶴木は同一なりと云ふことを得れども、其説明の仕方について、西山には其教判論上幾分の不明瞭の

點あることが考へらるゝなり。故に行觀に來りては、此の不明瞭否矛盾としも見らるゝ、恐れある所の聖道方便説は全く此をさけてとらず、強く二門兩實論の旗幟をその釋義の始めに押し立てゝ置き而も傍正の重にはその聖道門の諸門を完全に淨土門内に攝し和會し來るなり。實に一面より冷靜に云へば、聖淨二門は兩實なればこそ和會し得べきものなり。是れ西山に於いて聖道方便説を立つるその一面に、相對的釋義の上に兩實を説くある所以なり。故に今私に此の西山、鵜木兩上人釋義に更に聖道淨土二門は程度の上の差なりと見る鎮西上人の釋義と、相對論には二雙四重の敎判を以て二門に兩實を認め乍ら、機敎相應論を以て萬機普益の本願念佛を以て眞實敎として立つる絶對論に於いては、飽くまで聖道敎に得益を認めずして、誓願一佛乘を強く主張し、廢立を以て最後迄貫徹し、敢へて和會を許さざる今家宗祖上人の二門觀とを併せ考へれば、此に聖淨二門論の上には、その關係論に於いて大略左の四種の相對論型があることゝ信ぜらるゝなり。



道方便説を立てざるものなりと極論すれども、現在世に現れ残るその述作の上より論斷すれば、上來論究するが如く、方便説の組み立てられし事は明白なる事實にして、寧ろ西山上人の著作の全般に亘りて、種々名目の異なる彼の特殊法門の開説さるゝ所以も、一面より謂はゞ、其は全く此の方便眞實義の關係論の展開に過ぎずと見るも、強ち當らざる義にはあらずと信ぜらるゝなり。故に予は派祖證空より西谷の行觀へと、教判論上、兩上人の上には幾分の變化あることを此に知り得べしと言はむのみ。

注意！上の作圖の如くせば、一見西山、鶴木兩上人の教義は聖淨二門を唯一の佛道とし、唯單に二門二教を混一する人々なりと強ふるものと、或は、其家の人々より叱言を頂かむことを保せず、勿論兩上人の教義は、二門二道の上に廢立を認めたる上に淨土門に歸入し、而して後、淨土門内に於いて、淨土往生の行として、諸行と念佛とに、私會副合を認め、主張するものなることは、上來の所論の如し。然し乍ら、私會行成の結果は、諸行雜行を往生の行として許し認め、かつては聖道門自力の行として教てし所の諸行を、安心證得の上よりは、更に往生淨土の爲めの行業として之を認め、複活せしむるものなるが故に、行體論上此を冷靜に考へれば、其はすでに、淨土門内の行とは云へ、聖淨二門の相即融合なるべきが故に、敢て右の如く作圖す、願くば予が論意を汲みて諒とせられよ。一例を出せば、もとより行觀上人の如きも、明に聖道宗の外に淨土宗の存在を認むるものなり。聖道宗そのまゝを以て、直に淨土宗なりと云ふにはあらず。すでに聖淨二門兩實論の歸結として聖教萬差所詮一理と云ふことは云はざるなり。從つて聖道宗と淨土宗との融合は此を認めざるなり（玄私記二四右）。然し乍ら、今此をその傍正門の上より、私に批判すれば、聖道諸教の諸行と淨土一門の定散二善行とは、此を自力心で修すると他力心で修するとの相違こそあれ、行法そのものに替ることなく、兩者の融即を認めむとするものなれば、かくは作圖せしものなり。

次に又、二尊教論に於いても、西山證空は、其二尊一教論を立説する場合、釋迦教を彌陀教より

開出せる三身門の諸佛利生の方便教とする(上に出し秘決集第五二〇頁の文)傾あるものなるが、行觀の釋に於いては、又特有なる二尊一教論を立て、稍此と趣を異にせり。即ち「聖道教は此を佛に就きて云へば、自覺々他共に自覺に極り、淨土教は自覺々他大悲之他力へ極めて、聖道淨土の二門は佛果に於ける此の自覺覺他の二を教門に聖道淨土二門と開くなり。諸佛も彌陀も、佛果の體に就き自覺許りにて覺他の義無くては不滿之失なり。覺他許りにて自覺無くては不滿之失なり。故に聖道淨土二門は自覺々他の二にて三世恒常、鳥の二翅、車の二輪の如くなるべし。」(玄私記一五九右)と云ふ二門觀なれば、此の見解よりして、次に淨土一宗を立て、觀經一經に一代教を攝して二尊教を論するに際しても、玄私記一六〇右には、

此觀經二尊教トテ意、雖有彌陀ノ願。無釋迦ノ咨嗟未極。又雖有釋迦ノ咨嗟。無彌陀ノ願。未極。二尊寄合一儲教ナル故ニ二尊ト云フナリ。乃至然レバ則此經ノ定散證誠ノ定散ナル故ニ。望ニ彌陀ノ本願諸佛咨嗟ノ定散ト云フ。付ニ釋迦佛一。異方便ノ佛語ノ定散ト云フ。付ニ諸佛一證誠ノ定散ト云フ也。故ニ發遣來迎ノ三尊一教ト云フ。是レ西山義ノ料簡也。

と云ひ、而して「此の二尊一教は佛體佛語と云ふ法門に於いて立する位にて、此の時は定散と名號と各別には有らざるなり。定散と名號とを一に寄り合せて定散文中唯標專念名號得生と説く故に、定散の位に得生の益を持せて稱するなり。此に對して二尊各別にあるときを二尊兩部と云ふ法門な

廢

立

立

廢

聖道教

淨土教

諸經自力修行，定散位

觀經異方便，定散位

二尊兩部

傍  
 正——觀  
 經  
 正——念佛三昧——名號  
 傍——定散要門——定散  
 二尊一教

即ち此等の釋義に於いて、二尊一教の義を立つるには、全々二尊が寄り合ふて一教と成ると強く釋することは、其の何にも方便の義を見ざらむとする行觀の意向なるやうに考へらるゝなり。故に更に玄私記二二三右を披くに、

教土ノ事ハ非ニ釋迦ノ沙汰一。釋迦ノ得分<sup>ニ</sup>ハ行<sup>ハ</sup>ケト彌陀ノ淨土ニ勸<sup>メ</sup>ヅ<sup>コソ</sup>社。觀經十六觀ノ面也。此<sup>チ</sup>發遣之釋  
 迦<sup>トモ</sup>云フ。淨土ノ悟<sup>リ</sup>得益ハ。彌陀ノ得分<sup>ニ</sup>テ來迎<sup>○</sup>彌陀<sup>○</sup>ト云フ方也。釋迦ノ得分<sup>ノ</sup>悟<sup>リ</sup>ト云フハ。諸經ノ面<sup>ニ</sup>テ說<sup>テ</sup>眞

如法性<sup>ヲ</sup>皆蒙解脫<sup>セシ</sup>社<sup>ヲ</sup>。我本意思<sup>ト</sup>食<sup>ス</sup>悟<sup>ナン</sup>。此經ノ淨土ノ悟<sup>リ</sup>ハ彌陀ノ方ノ悟也。但シ彌陀ノ方ノ根立<sup>ニテハ</sup>雖<sup>レ</sup>有<sup>リト</sup>。往生ノ假ハ彌陀計<sup>ニテハ</sup>不<sup>レ</sup>顯<sup>ニ</sup>本願<sup>ガ</sup>。咨嗟セラレト顯<sup>ツル</sup>故<sup>ニ</sup>。定散ト咨嗟<sup>ミ</sup>顯<sup>スル</sup>往生ノ本願ナリ也。是<sup>レ</sup>迄<sup>カ</sup>釋迦發遣<sup>ノ</sup>得<sup>分</sup>也。此ガ悲喜交流深自慶<sup>乃至</sup>慈恩實難報<sup>ト</sup>釋<sup>ス</sup>（事讀下、二七右）此ノ慈悲社<sup>コソ</sup>起<sup>ニ</sup>過<sup>セシ</sup>諸經ノ面<sup>ニ</sup>有<sup>レ</sup>釋迦ノ慈悲<sup>ニテ</sup>。淨土ノ往生<sup>スル</sup>迄<sup>ノ</sup>密意<sup>ノ</sup>發遣<sup>ノ</sup>慈悲也。此土ノ聖道ノ悟<sup>ガ</sup>釋迦ノ本意ノ悟也。淨土ノ悟ハ彌陀ノ本意也。但シ又付<sup>レ</sup>之<sup>二</sup>重<sup>ノ</sup>法門<sup>ノ</sup>之押<sup>ハ</sup>樣<sup>ガ</sup>有<sup>ル</sup>也。其故ハ先<sup>ツ</sup>一義<sup>ニハ</sup>一切衆生ノ乍<sup>レ</sup>持<sup>ニ</sup>眞如法性ノ理<sup>一</sup>垢障覆深ナル故難<sup>レ</sup>顯<sup>レ</sup>。釋迦驚入<sup>ニ</sup>火宅<sup>一</sup>。開<sup>ニ</sup>理智行<sup>ノ</sup>三法門<sup>一</sup>。三身ト萬德說<sup>キ</sup>玉<sup>フ</sup>時<sup>シ</sup>。依<sup>レ</sup>心起<sup>ニ</sup>勝行<sup>ヲ</sup>機<sup>ハ</sup>漸頓則各稱<sup>ニ</sup>所重<sup>ニ</sup>皆蒙解脫<sup>ト</sup>此土入聖得果<sup>シテ</sup>顯<sup>ス</sup>眞如法性<sup>一</sup>此漏<sup>ル</sup>機<sup>ハ</sup>亦依<sup>ニ</sup>發遣來迎<sup>ノ</sup>他力<sup>一</sup>生<sup>レ</sup>彌陀ノ淨國<sup>ニ</sup>。彼淨土ニテ顯<sup>スル</sup>眞如法性<sup>一</sup>是ハ淨土成佛ノ義也。此面ハ教相分別ノ法門ナル故ニ機モ二機<sup>ニ</sup>分<sup>レ</sup>。教モ聖道淨土之二門<sup>ニ</sup>分<sup>レ</sup>。通別二土押<sup>シ</sup>分<sup>ル</sup>重<sup>ノ</sup>法門也。是序題門<sup>ト</sup>教相<sup>ノ</sup>之面也。是相對門<sup>ト</sup>一義<sup>ニハ</sup>。亦如<sup>レ</sup>是教相之上<sup>ニ</sup>。第五ノ定散料簡門<sup>ニテ</sup>。通別五文定散<sup>ト</sup>時<sup>ハ</sup>。通別一體<sup>ト</sup>云<sup>フ</sup>。自力ノ解行<sup>ニ</sup>說<sup>キ</sup>ハ八萬四千之諸經ノ面<sup>ニ</sup>。說<sup>キ</sup>返<sup>シテ</sup>異方便<sup>ト</sup>云<sup>フ</sup>時<sup>ハ</sup>。通<sup>チ</sup>極<sup>レ</sup>別<sup>ニ</sup>法門也。此時ハ萬機<sup>ナ</sup>極<sup>ニ</sup>一機<sup>ノ</sup>位<sup>ニ</sup>。說<sup>ク</sup>一切衆生爲煩惱賊害<sup>ト</sup>。此時ハ萬行<sup>ハ</sup>極<sup>ニ</sup>念佛一行<sup>ニ</sup>。十方淨土<sup>ハ</sup>極<sup>ニ</sup>別所求<sup>ノ</sup>一土<sup>ニ</sup>。諸佛<sup>ハ</sup>極<sup>ニ</sup>彌陀一佛<sup>ニ</sup>。定散萬機<sup>ハ</sup>極<sup>ニ</sup>九品一機<sup>ノ</sup>位<sup>ニ</sup>。一向專念<sup>ト</sup>云<sup>フ</sup>法門也。

と云ひて、釋迦彌陀二尊の間に各々其役分を定めて、而も教相の面では（廢立）各別と立て、其上に

念佛一法と通別一體を論ずる點、即ち傍正門の義邊では此の二者を一體となして、此に二尊一教論を立つるものなり。此れ行觀が一念義の説に對する上より方便説を嫌ひて合體の一教論を立てしものにして、勿論西山上人の釋義も合體の形式なれども、彼證空に在りては、諸行は方便の行として其上に更に一體説を立つるものなるが爲め、此の一體説は、此を行觀の二者を同價值に認め置いて然る後に正しく判然と立つる所の一體説に對しては、それが思想並に教義の發達上より論すれば、此に西山の一體説は、行觀の一體説の前提となりしものと云ふべきなり。蓋し西山證空の釋意を考察するに、やがては此の歸結點に迄進むべきものなりならむも、其は表現の上には未だ充分ならざりしなり。依りて行觀に至りて判然と釋成さるゝに至りしなり。故に玄私記四二三右には、行觀は聖淨二門兩實論を説き述べたる後を承けて、此を會通するに際し、

然ルニ聖道門<sup>ニ</sup>自力自覺<sup>ノ</sup>佛<sup>ヲ</sup>。淨土門他力覺他<sup>ノ</sup>佛<sup>ト</sup>云フ。是<sup>ヲ</sup>又二而不二<sup>ト</sup>云フ會通<sup>スル</sup>時<sup>ノ</sup>。聖道門<sup>ノ</sup>

自覺成佛<sup>ノ</sup>方<sup>ニ</sup>。淨土門<sup>ノ</sup>覺他成佛之功德<sup>ヲ</sup>持<sup>セテ</sup>。自覺覺他覺行窮滿<sup>ノ</sup>佛<sup>ヲ</sup>會通<sup>シ</sup>。淨土門<sup>ノ</sup>覺他成佛

彌陀<sup>ノ</sup>方<sup>ニ</sup>。自覺成佛<sup>ノ</sup>功德<sup>ヲ</sup>持<sup>セテ</sup>。自覺覺他覺行窮滿<sup>ノ</sup>佛<sup>ト</sup>會通<sup>スル</sup>也。如<sup>レ</sup>此會通<sup>スル</sup>位<sup>ハ</sup>當是<sup>レ</sup>相對門<sup>ト</sup>云フ

重也。此<sup>ノ</sup>上<sup>ニ</sup>大不<sup>ニ</sup>二門<sup>ト</sup>云フ和會門<sup>ノ</sup>時<sup>ノ</sup>。聖道門<sup>ノ</sup>自覺々他覺行窮滿<sup>ノ</sup>佛<sup>ト</sup>。淨土門<sup>ノ</sup>自覺々他覺行窮

滿<sup>ノ</sup>佛<sup>ト</sup>兩門<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>頓教一乘海<sup>ト</sup>云フ時<sup>ニ</sup>。機<sup>ヲ</sup>バ萬機<sup>ヲ</sup>一機<sup>ニ</sup>發起<sup>シテ</sup>。法<sup>ヲ</sup>バ聖道淨土通別<sup>ノ</sup>二法<sup>ト</sup>發

起<sup>シテ</sup>。此機法<sup>ノ</sup>二<sup>ツ</sup>寄合<sup>セテ</sup>。頓教一乘海<sup>ト</sup>會通<sup>スル</sup>時<sup>ノ</sup>。只如<sup>ニ</sup>二車<sup>ノ</sup>二輪<sup>ノ</sup>一到<sup>ニ</sup>千里<sup>ニ</sup>和會門<sup>ノ</sup>之法



門ナリ也。是又取リテ返シテ一機萬機ニ開イテ。萬機各ニ二法ヲ持セテ。頓教一乘海ト云フ時ハ。又各如ニシテ車輪。各々<sup>ニ</sup>到<sup>ル</sup>千里ノ道。會通ノ法門也。如此以ニ會通スル位。云テ大不二ノ和會門ト聖道淨土二門ハ。自力他力ニテ無ニ自他彼此ノ相違ニ位。一種ノ佛法トテ和會門也。

とあり。聖淨兩實論の上に、合體の二尊一教論を立て、佛法を一種とせる所は其の釋義の結論たることを想ふなり。實に二門は兩實なるが故に、一種の佛法として和會さるゝものなり。されば以上西山行觀兩上人の教判論を比較するに、其の思想の歸結は、佛法を唯一種道とする點に於いては、始終同一なりと雖も、西山の聖道方便説を一度とるに反し、行觀は此を全然斥けてとらざりし點を兩者の異りとするなり。

# 七、廢立の意義を論じて今家の教判論に及ぶ

最後に少しく考察し度く思はるゝは、證空及び行觀の所謂廢立の意義なり。西山家にありては、常に選舉集の稱示を承けて廢立爲正の義は此を唱導すれども、その廢立の意義たるや、第三者を以て批判せしむれば、其は全く行法そのものゝ上に於ける廢立にあらずして、同一定散念佛の行法を自力の執情を以て自己の機功を認めて修すると、此執情を捨て去り、機法一體他力の領解よりして修するとの間に於ける廢立なることなり。換言すれば、自力各別の機の妄執情を洗ひ去る事の始終に於いて、聖淨二門の間に教、若しくは行の上に廢立の義は立つべきものとして、此の自力の情を

捨て去り、一度佛力他力に歸入したる上は、行法そのものは何等廢捨すべきに非ず、寧ろ此を他力行として一切を弘願念佛の一法中に攝し、此を弘願他力海中の行として認むべしと云ふが和會傍正門の根本義綱たるなり。故に機の方より論すれば、自力聖道の行、他力淨土の行として二と分かれ兩實と認めらるべけれども、その聖淨二門の行法そのものは、全然根底より異りたるものにあらず寧ろ一なりと認むる事は、すべて西山義の一致する所なり。故に此の行法上の同一にして、歸する所、佛法は一種の道として和會さるべしと云ふ事は、西山義の始終一貫せる思想なると共に、此等の義旨はすべて、その立つる廢立義の裏面に流るゝ所の考なり。故に此の和會思想の根基の上に築かれたる廢立義なれば、一面より此を論究すれば、其の廢立の意義は徹底することを得ずして、必らずやその裏面の和會思想はやがて表に現はれ來らざるを得ぬなり。即ち三重法相の第二重に、廢立に次いで傍正の重が來る所以は實に此にあるなり。而して傍正門を立するが故に次いて起行門として助正の重を認めざるべからざる也。従つて其の結果は、此の起行門に認めるゝすべての行業は但にそれが佛恩報謝の爲めのみの行としては認め難く、正しく往生得脱の爲めの行業、又は自の淨土成佛の莊嚴の爲めの行業と認めざるべからざるに至りし所以なり。故に西山義にありては、假令廢立爲正と云ふも、廢立するにあらず和會するにありと云ふも過言に非ざるべしと信するなり。此れ今家我祖親鸞聖人が、西山上人と等しく、其の始めは聖淨二門兩實なることを相對論的敎判、即

ち彼の二雙四重の判の上に於いては認め乍ら、機敎相應論に於いては、難行道聖道門自力の敎法は未代の根機の前には永久に閉ぢたりと廢するとき、やがて行法そのものゝ上に迄も廢立の意義を認め、所謂聖淨二門、正雜二行の上に嚴然たる廢立の批判を下し、而も行法そのものゝ廢立迄が、實に二尊一敎一致の精神なりと決判するものとは、大に思想上の根本的差異あるものなることを此に確認し得るなり。實際西山義にありては、二行論に於いて、其面に中りては、正雜二の上に通別廢立の義を立つれども、傍正門には通別一體の義門を以て直ちに此を和會行成することは、誠に、今家の義より論究すれば、それは曲せ事にして、其は全く行法そのものゝ上に迄廢立の意義が徹せざることを證するものなり。況んや西山義の廢立は、傍正和會の本義を確立せむが爲めに、安心門に入るに先ち、敎相門に此を認むるものにして、その傍正和會は、即ち言を換ふれば行成に外ならず、従つて廢立と行成とは、西山家にありては唯一思想の兩面を示すものにして、其は相矛盾すべきものにもあらず、又相衝突すべきものにも非るに於いてをや。

要するに西山家と今家、一は廢立の裏面に和會行成の義を含み、一はどこまでも廢立一本立ちに進みて、敢へて諸行の復活を許さざる所以のものは、更に深く考察すれば、兩家宗祖の思想及び信仰に根本的相違の大なるものありて存し、而も兩者が往生淨土宗と云ふ同一元祖の門に養はれ、本願の念佛を以て往生淨土を期する敎義を奉持して、當時の敎界に打ち出しが爲め、かくは色彩の

異れる二種の念佛宗を見るに至りしものなるが、吾人は更に兩家祖師の根本的思想、並に信仰の相違の探求につき深き興味を感ぜしめらるゝものなり。(二、九、一八)

訂正！ 前號所載の本稿中八二頁引用の羅注二(二三上)の釋文の説明、誤りて他の釋を混入せり。左の如く訂正されむことを敢へて乞ふ。

八二頁第三行中。「六宮殿。六宮殿を」とある二ヶ處、七字を削ること。

第四行、六觀の下、「に配當し乍ら、此」の七字を削ること。

第六行、第一日觀の下、「第一殿乃至其の次に」の二十字を削ること。